浄覚派撰に擬せられる二つの『悉談章』

瀧瀬尚純

一　初めに

二〇世紀初頭、オアシス都市敦煌郊外の莫高窟より、後に「敦煌文献」と呼ばれる大量の文書が発現された。各地に将来されたこの文書の調査・研究が進むにつれ、それらの中に従来未知の禅宗文献が数多く含まれることが紹介される。荷沢神会の対論記録である『菩提達摩南宗定是非論』（以下『定是非論』）や北宗系燈史書『楞伽師資記』・『伝法宝紀』等が代表的な例であり、新出資料の研究により、従来伝え知られて来た燈史書や語録のみでは明かされなかった初期禅宗史の思想や祖統の解明が行われたことは、周知であろう。本稿では胡適や鈴木大拙達に始まる敦煌禅宗文献及び初期禅宗史の膨大な研究蓄積を振り返る暇がないので割愛するが、初期禅宗教団がしばしば言われる、いわゆる「南能北秀」或いは「南頓北漸」と単純に理解出来ないことが明かされたことは、敦煌禅宗文献発現以来重ねられた研究の代表的成果の一つと言える。

具体的に言えば、『定是非論』に記録される「滑台の宗論」において神会は六祖神秀→七祖普寂と次第する教団を「北宗」と批判する。しかし、所謂北宗教団において、すべての禅者達が同一の祖統観を持ってい

たとは言えないことが敦煌禅宗文献発現以降の研究により明らかとなってゆく。例えば浄覚撰『楞伽師資記』においては、東土第一祖を求那跋陀羅とし、弘忍の法を継ぐ者として神秀と同位に作者浄覚の師・玄賾を位置づける。更に同書では『二入四行論』を達摩直説として高く評価するが、他方、弘忍作とされる『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』（以下、『修心要論』）の内容を改変しながら処々に同書へ引用しつつも、その存在を信じるに足らぬものと批判する。また神会が見たもう一方の北宗系燈史書、『伝法宝紀』においては、求那跋陀羅は東土第一祖となり得ず、他方、弘忍の下には法如を独立した一代の嗣法者としてみなす。また『楞伽師資記』で達摩直説と高く評価された『二入四行論』は、『伝法宝紀』において、達摩の方便的説示を弟子が集めた「権化一隅之説」としてその存在価値が否定的に扱われる。先に見た如くの祖統観やテキストに対する評価を異にする者たちが東山法門直流の北宗内部に於いて「法如派」等と名付けられるグループを形成していたと考えられている。これらの見解は、柳田聖山氏の『初期禅宗史書の研究』[1]を始め、田中良昭[2]、伊吹敦[3]、小川隆[4]各氏等[5]によって詳細に明かされているので、そちらを参照されたい。

以上のような初期禅宗史の研究には、敦煌禅宗文献の解読、研究が常に不可欠となる訳であり、南・北両宗の諸テキストを始め、その他、例えば保唐宗の『暦代法宝記』等多くのテキストについては考察が加えられている。しかし、未だ完全には解明されていないと言える文献も多く存在する。その中の一つが中国国家図書館に蔵せられる『俗流悉談章』及び『般若心経悉談章（擬）』[6]である。本テキストは、ＢＤ〇七三六四（北京図書館・鳥〇六四）とナンバリングされ、一紙に写されている。後述するが、このテキスト、特に『俗流悉談章』は、『仏説楞伽経禅門悉談章』（以下、『禅門悉談章』）と関係のあることが既に指摘[7]されている。しかし、先行研究では、『禅門悉談章』の作者を圭峰宗密[8]や大慈寰中等[9][10]と誤った比定を行っているので、『禅門悉談章』への理解が正確になされていない。その為、両テキストに対する考察も、不十分と言える。本稿で

は、敦煌禅宗文献の中でも、『悉曇章』と言う特に特殊な形態を取るテキストについて考察したい。

二　『禅門悉談章』について

本稿で採り上げる『俗流悉談章』及び『般若心経悉談章（擬）』は、『禅門悉談章』との関係性が既に指摘されている。それは、『俗流悉談章』と『禅門悉談章』の序に述べられる作者が同一と考えられるからである。まず『禅門悉談章』では、その序に、

諸仏子等、合掌至心必聴。我今欲説大乗楞伽悉談章。悉談章者、昔大乗在楞伽山。因得菩提達摩和尚、宋家元年従南天竺国、将楞伽経来至東都、跋陀三蔵法師奉諮翻訳。其経総有五巻、合成一部、文字浩浬、意義難知。和尚慈悲広済郡品。通経問道、識攬玄宗、窮達本原、皆蒙指受。又嵩山会善沙門定慧、翻出悉談章、広開禅門、不妨慧学、不著文字、並合秦音。亦与鳩摩羅什法師通韻、魯留盧樓為首。（大正八五五三六ａ）

諸仏子等、合掌して至心に必ず聴け。我れ今大乗楞伽悉談章を説かんと欲す。悉談章なる者は、昔大乗楞伽山に在り。菩提達摩和尚、宋家元年南天竺国従り、楞伽経を将ち来たりて東都に至ることを得たるに因りて、跋陀三蔵法師諮を奉じて翻訳す。其の経、総じて五巻有り、合して一部を成すも、文字浩浬にして、意義知り難し。和尚慈悲もて広く郡品を済う。経に通じ道を問い、玄宗を識攬し、本原に窮達し、皆な指受を蒙る。又た嵩山会善沙門定慧、悉談章を翻出し、広く禅門を開き、慧学を妨げず、文字に著せず、並びに秦音に合す。亦た鳩摩羅什法師と韻を通じ、魯留盧樓を首と為す。

と言う。まず菩提達摩によって南天竺国より宋家元年に東都に『楞伽経』が齎され、求那跋陀羅により訳出

されたと述べる。続けて、達摩和尚が求那跋陀羅から得た経典五巻を一部に合し、慈悲をもって広く衆生の為に教えを蒙らせたと説き、この『禅門悉談章』が「嵩山会善沙門定恵」なる人物によって成されたことを示す。本序文には、達摩によって『楞伽経』が東都に齎され、その年次が宋家元年（劉宋元年・永初元年（四二〇））と述べること、『楞伽経』を五巻とする点など、疑義を抱かせる箇所[11]も多いが、具体的な見解を得ることは出来ないので、指摘に留め、これ以上立ち入らない。

次に、『俗流悉談章』は序に於いて、

夫悉談章者、四生六道、殊勝語言。唐國中岳釈氏沙門定恵法師翻注。並合秦音鳩摩羅什通韻、魯流盧楼為首。（任継愈主編『国家図書館蔵敦煌遺書・第九十六冊』北京図書館出版社　二〇〇八　二九七頁）

夫れ悉談章なる者は、四生六道の、殊勝の語言なり。唐國釈氏沙門定恵法師翻注す。並びに秦音の鳩摩羅什通韻に合して、魯流盧楼を首と為す。

と、「唐國中岳釈氏沙門定恵法師」により、『悉談章』が作成されたと述べる。以上、両テキストの序に述べられる如く、作者「定恵」が居住した地、「中岳」・「嵩山」は同一地であること、「鳩摩羅什通韻[12]」に合わせ『涅槃経』の悉曇音「魯流盧楼」を採ること等が共通することから作者「定恵」は同一であると考えられている。[13]

では、『俗流悉談章』・『般若心経悉談章（擬）』と関係性が深いと考えられる『禅門悉談章』とは、どのようなテキストであるのか。以下に少しく考察したい。『禅門悉談章』については、筆者は既に二度に渉り論じた[14]ので、詳細はそちらに譲るが、筆者「定恵」について、及びテキスト成立・思想について以下の点を指摘することが出来た。

（一）『禅門悉談章』の作者定恵は、神秀同学の慧安や神秀の弟子景賢が住した所謂北宗の代表的寺院

「嵩山会善寺」の沙門と言う肩書持つ。また序において、達摩が将来した『楞伽経』を求那跋陀羅が翻訳し、それを受けて達摩が『楞伽経』を広めると言う、循環的で特殊な方法は採りつつも、求那跋陀羅から達摩への『楞伽経』伝授を主張した北宗禅者浄覚と同じ祖統を述べる。以上から定惠は、灯史類中に比定しうる人物や生没年の確定は出来ないものの、北宗禅者であり、浄覚下、或いは浄覚と祖統観を一にする人物である。

（二）テキスト成立は、六本の写本中、「開元二八載（七四〇）、天宝四・五歳（七四五・七四六）」の年記を書く『戸籍残片』と擬題されたテキストを表面に有するS四五八三vが存することにより、開元二八年を上限と考えることが出来る。また本文中には

質領盛質領盛。第二住心常看浄、亦見亦聞無視聴。生滅両亡由未證。従師授語方顕定、見佛法身無二性。（大正蔵八五　五三六a）

質領盛質領盛。第二住心して常に看浄し、亦た見亦た聞くも視聴無し。生滅両亡するは未だ證せざるに由る。師に従りて語を授かれば方めて定を顕し、佛の法身を見るに二性無し。

と、荷沢神会が「凝心入定、住心看浄、起心外照、摂心内澄」と北宗を批判する際に掲げた四字・四句の一句が載せられている。神会が四字・四句の格言を主張しだしたのは、遅くとも『定是非論』に記録される滑台大雲寺での北宗排撃の時点、開元二十（七三二）年以前である。北宗を批判する四字句を創作或いは参照するには、開元二十年以前に北宗文献からそのアイデアを引用しなければならないのは言うまでもない。また、『定是非論』よりも成立が古いと考えられる『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』（以下『壇語』）に於いても神会は既に四字句を否定[15]しているので、当然『壇語』成立以前に四字句を創作していたのであろうが、『壇語』の成立年代は不確かであるので、四字句の創作年を確定させること

は出来ない。しかし『壇語』はそのタイトルに神会を「南陽和尚」と称するので、『壇語』にて語られる内容は、神会の南陽時代の記録[16]と考えられている。神会は『宋高僧伝[17]』によると開元八（七二〇）年南陽龍興寺に住することとなる。となると、四字句の創作は、神会が南陽に住した開元八年前後から滑台での無遮大会が行われた開元二十年までに行われたことになる。逆に北宗側も神会の激しい批判以降、神会が批判の際に用いた句を使うとは考えがたい。そこで、神会が『禅門悉談章』を参考にしたとするならば、当然開元八～二十年の間にはすでにテキストが編まれていたと考えなければならない。先にS四五八三vの年代記と考え合わせると、本テキストの成立は、開元年間の早い段階と推測できる。

（三）テキストの思想・性格は北宗文献と等しい。根拠としては、本文中に

諸仏子、莫嬾堕、自勧課（中略）耶囉羅、端坐、娑訶耶、莫臥。（大正蔵八五　五三六a）

諸仏子よ、嬾堕すること莫くして、自ら課に勧めよ（中略）耶囉羅、端坐して、娑訶耶、臥すること莫かれ。

と怠ることなく坐禅することを説き坐禅重視を明示している点がまず指摘出来る。次いで、

看心須併儻。掃却垢穢除災障、即色即空会無相。（大正蔵八五　五三六a）

心を看じて須く併儻すべし。垢穢を掃却して災障を除けば、即色即空にして無相に会す。

眼中有翳須磨濯、銅鏡不磨不中照。（同b）

眼中に翳有れば須く磨濯すべし、銅鏡磨かざれば照らすに中らず。

無始已来居暗室、生死流伝不得出、只為愚迷障慧日。（同b）

無始已来暗室に居して、生死に流伝して出づることを得ず、只だ愚迷の慧日を障ぎる為なり。

佛与衆生同體段、本原清浄磨垢散。（同b）

佛と衆生は體段を同じくし、本原清浄にして磨けば垢散ず。

等と「心性本浄・客塵煩悩」の立場よりの説示が散見出来る。これらは衆生の仏性を覆っている煩悩を払うことにより見性が可能であると説く、所謂北宗の見性・修道観[18]と全く等しい。また、『楞伽師資記』や『南天竺国菩提達摩禅師観門』、『大乗無生方便門』等、北宗文献群に述べられる内容と同一の表現が多く見られることからも、北宗系綱要書と位置付けることが出来る[19]。

右述のように、まずテキストを思想的に見て、『禅門悉談章』は北宗文献の一つと位置付けることが出来る。そしてその序に求那跋陀羅から達摩への『楞伽経』伝授と言う北宗禅者浄覚が主張した特殊な祖統を述べる為、浄覚の弟子もしくは、浄覚と祖統観を等しくする人物によって書かれた北宗系綱要書と結論づけることが出来る。では、『禅門悉談章』と作者が同一の『俗流悉談章』及び『俗流悉談章』と一紙に写される『般若心経悉談章（擬）』はどのようなテキストであるか以下に論じたい。尚、稿末にテキスト全文の翻刻[20]と訓読を添付しておいたので、参照されたい。

三　『俗流悉談章』について

ではまず『俗流悉談章』から考察を進めたい。改めて『俗流悉談章』の形態[21]を見てゆくと、中国国家図書館に収蔵される本テキストは、ＢＤ〇七三六四とナンバリングされている。序より首尾完全で、文字数は約七五〇字、同紙に『般若心経悉曇章（擬）』の断簡を写し、他に敦煌テキスト等存在しない孤本である。『俗流悉談章』はタイトルにあるが如く、「悉談章」つまり「悉曇章」であることを標榜している。「悉曇章」とは、梵字字母の綴りやその生字を列挙した小学児童の為の学科本を意味するが、『禅門悉談章』と同じく本

テキストにはそのような特徴は全く現れていない。また悉曇字と確認できるのは、句間に挿入されている悉曇字らしき字以外は、序に挙げられる『涅槃経』文字品の悉曇音[22]、「魯流（留）盧樓」のみで、この点も『禅門悉談章』と共通する。形態としては、『禅門悉談章』と同じく所謂「悉曇章」とは別物と見なければならない。そして、偈頌形式の本テキストを通読すると、『俗流悉談章』と名付けられる通り、俗世間・衆生世界での生活の例をベースとし、その中に仏教用語を織り交ぜた説示を多く行う。一例を挙げると、

何邏移。何邏移。第七俗流多所疑。恆被身中六賊欺、不求解脱不思議。魯流盧樓何邏移。貪求財物養妻兒、懃苦艱辛亦不辭。入門妻兒云索衣、出戸王官怪責遅。佯良浪黄賞。那何邏移。此苦真難向。

何邏移。何邏移。第七に俗流は疑う所多し。恆に身中の六賊の欺きを被り、解脱の不思議を求めず。魯流盧樓何邏移。財物を貪り求め妻兒を養い、懃苦艱辛も亦た辭さず。門に入りては妻兒、衣を索めんと云い、戸を出でては王官遅きを恠め責む。佯良浪黄賞。那何邏移。此の苦は真に向い難し。

と、衆生が六賊つまり六根の働きに欺かれることにより、不思議解脱を求めることが出来ず苦しむ様を、財物を貪り求めることや、衣服を強請（ねだ）る家族を養うこと、或いは王や官僚に納税を迫られる苦しさに准えている。その他、

何邏何、何邏何。第四俗流愚者多、不自省覺談説他。夫妻鬪諍相罵呵。魯流盧樓何邏何。張眉努目喧破鑼、牽翁及母怕你摩。皆不出離三界坡、将為此苦勝蜜多。那羅邏何舎。此悪法須舎。

何邏何、何邏何。第四に俗流は愚者多し。自ら省覺せずして他に談説して、夫妻鬪諍相い罵呵す。魯流盧樓何邏何。張眉努目して破鑼よりも喧しく、翁及び母を牽き你が摩を怕れしむ。皆な三界の坡を出離せずして、将に為えり此の苦は蜜多に勝ると。那羅邏何舎。此の悪法須く舎てるべし。

と自ら覚らず、他人に説法する愚かさを夫婦喧嘩の喧しさを例に挙げる一段等[23]、全体に渉って、俗世の営み

の愚かさを用いて、三界六識に惑わされる衆生を表現している。そのように惑わされた衆生はどのようにすれば見性することが出来るのか以下に見てゆきたい。本テキストでは、例えば、

西方浄土不肯向、欲含魔軍相閉障。出離牢獄依無相。不生不滅速廻向。佯良黄賞。各各脩無上。

西方浄土に肯えて向わずして、魔軍を含みて相い閉障せんと欲す。牢獄を出離するは無相に依る。不生不滅に速に廻向せよ。佯良黄賞。各各無上を脩せよ。

と、「無相に依れば苦しみの牢獄から出ることが出来る」、或いは「無上を修習せよ」と修道の方法ではなく見性のあり様を表現した言句に依る説示を行う。

では、『俗流悉談章』の根本思想とは何か。それは、「心性本浄・客塵煩悩」の如来蔵・仏性思想であろう。

第八俗流佛性同。三乗演妙會真宗。

第八に俗流は佛性と同じ。三乗妙を演べ真宗に會す。

俗流者仏果身、其中脩習無苦懃。

俗流なる者は仏果の身にして、其の中に脩習して苦に懃る無し。

と述べられるように、俗なる衆生の仏性は本来清浄であるとの立場である。しかし、現実の衆生は

第一俗流無利見。飲酒食肉相呼喚。讒言諂偽相鬬亂、懐挾無明不肯断。魯流盧樓現練現。貪愛愚癡無崖畔、眷屬婚姻相計半。三界牢獄作留難、俗流顛倒共嗟歎。

第一に俗流は利見無し。酒を飲み肉を食いて相い呼喚す。讒言して諂偽し相い鬬亂し、懐に無明を挾みて肯えて断たず。魯流盧樓現練現。貪愛愚癡は崖畔無く、眷屬は婚姻して相い計半す。三界の牢獄は留難を作し、俗流顛倒して共に嗟歎す。

の如く、自ら煩悩に覆われて三界の苦しみを受けている。そして先述した

皆不出離三界坡、将為此苦勝蜜多（中略）此悪法須舎

「衆生は三界の営みや苦しみが般若波羅蜜に勝ると考えてしまうが、そのような間違った道理（悪法）は捨てなければならない」とそのような迷いの除去の必要性を説く。

これら一連の説示は、いわゆる北宗文献と共通する。「心性本浄・客塵煩悩」の立場よりの教説は『禅門悉談章』の思想を論述した際にも挙げた通り頻出するが、一例を挙げると、

日光不壊、只為雲霧覆障。一切衆生清浄之性、亦復如是。只為攀縁妄念、諸見煩悩重雲覆障、聖道不能顕了。（柳田『初期禅史Ⅰ』一四六頁）

日光は壊せず、只だ雲霧に覆障せらるるのみ。一切衆生清浄の性も亦復た是の如し。只だ攀縁妄念、諸見煩悩の重雲に覆障せられて、聖道を顕了すること能わざるのみ。

と『楞伽師資記』慧可章に述べられる如くである。更に、本文中に現れる三界・三毒・六賊によっての説示は例えば『観心論』[24]に

一切衆生由此三毒及以六賊、惑乱身心沈没生死、輪廻六趣受諸苦悩。（中略）若復有人断其本源、則衆悪皆息。求解脱者除其三毒及以六賊、自然永離一切諸苦。又問、三界六趣廣大無邊。若唯観心云何免彼之苦。答曰、三界業報唯心所生。本若無心、則無三界。三界者即是三毒。（下略）（田中『敦煌Ⅱ』一〇七頁）

一切衆生は此の三毒及以び六賊の身心を惑乱するに由りて生死に沈没し、六趣を輪廻して諸の苦悩を受く。（中略）若復し人有りて其の本源を断てば、則ち衆悪皆息む。解脱を求むる者は其の三毒及以び六賊を除けば、自然に永く一切の諸苦を離る。又た問う、三界六趣は廣大無邊なり。若し唯だ心を観ずるのみにして云何が彼の苦を免れん。答えて曰く、三界業報唯だ心の生ずる所なるのみ。本より若し心無くんば、則ち三界無し。三界なる者は即ち是れ三毒なり。（下略）

とあるのに等しい。そして、関係性の深さが指摘される『禅門悉談章』とは、管見の限り、同様の表現は見出すことが出来なかったが、根本的立場である「心性本浄・客塵煩悩」の仏性思想は両者に共通する。また、『禅門悉談章』では北宗文献群と共通する表現が多く出た[25]が、『俗流悉談章』の内容の殆どが俗世間・衆生世界での生活の例をベースとし、その中に仏教用語を織り交ぜた説示を行っている。その性格上、そもそも仏教もしくは初期禅宗文献で使われる用語・言句が少なく、『禅門悉談章』のように多くは、北宗文献と同様或いは思想を同じくする表現を見つけることは出来なかった。しかし、先に示した通り、三界・三毒や六賊を除かなければ見性出来ないとの姿勢は『観心論』と一である。

以上、『俗流悉談章』について考察を加えてきたが、他の初期禅宗文献と違い、本文に在俗の生活例を多く盛り込むと言う本テキストの特殊な性格上、『禅門悉談章』のように多くは北宗文献と共通する表現を見出すことは出来なかったのは、先に述べた通りである。しかし、序における作者の『禅門悉談章』との共通性或いは限定的とは言え、根本思想や同一思想より出でる表現の存在より、『俗流悉談章』は『禅門悉談章』と同じく北宗文献と位置付けることが出来ると言えよう。

では、次いで『般若心経悉談章（擬）』について論を進めたい。

四　『般若心経悉談章（擬）』について

『般若心経悉談章（擬）』の形態を確認すると、『俗流悉談章』と一紙に写される五五〇字の本テキストは、前半部分が欠落した断簡である。そして『俗流悉談章』と同様、「魯流盧樓」以外に悉曇字らしき文字が挿入されているが、所謂「悉曇章」とは言えず、敦煌テキストその他に存在しない孤本である。では、『般若

心経悉談章（擬）』はどのようなテキストと理解すれば良いか、以下に考察したい。

本テキストは、先に述べたように「悉曇章」とは言えず、『般若心経』の注釈書的性格を有する。断簡の為、特に前半部が判然としないが、本文より、『般若心経』の「無無明亦無無明盡」以下を注釈していると考えられる。

その構造を一段取り挙げて確認すると、

嗄囉浪、嗄囉浪。九明般若神咒廣。是大明咒能開晃、照曜魔軍自除蕩。蕩怛迦迦怛浪蕩、魯流蘆樓嗄囉浪。是無上咒無背向、是無等咒無等量。超過日月大圓相、能除一切苦妄。真實不虚神咒状。後擧流通満十方、令遣讀誦遍稱揚。揚良浪怛浪。黄棠娑訶揚長迦。

嗄囉浪、嗄囉浪。九に般若神咒は廣きことを明きらむ。是れ大明咒は能く晃を開き、照曜すれば魔軍自ら除蕩す。蕩怛迦迦怛浪蕩、魯流蘆樓嗄囉浪。是れ無上咒は背向すること無く、是れ無等咒は等量無し。日月大圓相を超過して、能く一切苦妄を除く。真實にして虚ならざるは神咒の状なり。後に擧げて流通せしめて十方に満たし、讀誦して遍く稱揚せしむ。揚良浪怛浪。黄棠娑訶揚長迦。

と、悉曇字を挟みながら、『般若心経』の本文に直接注釈を加える体裁[26]を採り、作者の解釈を書き加える。

そして、本文中、特に注目すべきは、

観心無罣無礙故、無滅無生無恐怖。怖怛路倶。倶怛路怖。魯流蘆樓吁嚩路。遠離顛倒夢想故、究竟涅槃無染汚

心に罣無く礙無きを観るが故に、滅無く生無く恐怖無し。怖怛路倶。倶怛路怖。魯流蘆樓吁嚩路。顛倒夢想遠離するが故に、究竟涅槃にして染汚無し。

如来衆行等恒沙、融變三千無有差。各々精心懃結跏、東湧西没莫能遮

如来の衆行は恒沙に等しく、三千に融變して差有ること無し。各々心を精らにして結跏に勤めれば、東湧西沒して能く遮ぎること莫し。

の二節であろう。最初一節には、『般若心経』本文に、「観」の字を挿入することにより「観心」の要[27]を説き、次の節では、「結跏・坐禅[28]」に勤めることを説く。「観心」の要や「結跏」の奨励は、他の文献から例を挙げるまでもなく、北宗の重要な代表的教説である。この二つが含まれている点で、『般若心経悉談章（擬）』は、北宗系綱要書と言うことが出来よう。

また、初期禅宗文献群には、『般若心経』に関する注疏書[29]が数多く存在する。例えば資州智詵撰『般若波羅蜜多心経疏』や、紀国寺慧淨に帰せられる『般若波羅蜜多心経疏』、江南禅師智融『般若波羅蜜多心経注』等が挙げられるが、特に注目すべきは、淨覚撰『注般若波羅蜜多心経[30]』であろう。『俗流悉談章』と『禅門悉談章』の著者「定恵」は、先に論述した通り、淨覚と祖統を一にする人物である。残念ながら『般若心経悉談章（擬）』は前半部分が欠落している為、序や本文内容・作者名を窺い知ることが出来ないが、淨覚には先述の『般若心経』の注釈書が存在する。『禅門悉談章』で淨覚と同じく、求那跋陀羅から達摩へという楞伽の祖統を主張する嵩山の「定恵」が著した『俗流悉談章』と一紙に写され、淨覚も注釈書を撰した『般若心経』を「悉曇章」という形で書き記した『般若心経悉談章（擬）』の作者が、淨覚或いは定恵と無関係とは考え難いのである。『般若心経悉談章（擬）』を定恵の作と推測することは出来るが、断定することは出来ない。しかし『禅門悉談章』や『俗流悉談章』の作者定恵と無関係とは決して言えないのではないか。『般若心経悉談章（擬）』の作者も、その本文の思想的内容から北宗系禅者であると位置づけることが出来よう。更に北宗禅者の中でも、形は違えども『般若心経』の注釈書を記したと言う共通点、及び『禅門悉談章』で楞伽の祖統を主張する定恵が撰した『俗流悉談章』と連写される点からも、淨覚や定恵と思想を一

にする人物であったことは間違いがない。

五　小　結

以上、『俗流悉談章』及び『般若心経悉談章（擬）』について考察を加えてきたが、本稿ではこの両テキストが、『禅門悉談章』と同じく北宗系綱要書であり、その中でも特に浄覚に関係する人物によって撰されたと結論づけることが出来た。浄覚の主張する求那跋陀羅から達摩へという楞伽の伝統は、北宗内部においても六祖神秀→七祖普寂と次第する頃には廃れていったと考えられる。神秀没（七〇六）後、張説によって撰された碑文「玉泉寺大通禅師碑銘并序」に、神秀六祖が明言されている点[31]を見てもそれは明らかである。しかし、浄覚の主張した祖統が禅者の耳目から完全に消えたかと言えばそうではない。時代を下って成立する、『暦代法宝記』には、浄覚が『楞伽師資記』を撰して、妄りに求那跋陀羅を東土の第一祖にしたてたと批判する記事[32]が載せられる。このようにして、浄覚の祖統の主張は有る程度命脈を保つわけであるが、それは『楞伽師資記』と言う祖統を記した書物が残された為だけに保たれたとは単純に言い切れないのではないか。浄覚の弟子や浄覚派と言われる人物は詳しく知られておらず、わずかに『注般若波羅蜜多心経』の跋文に載せられる「遺法比丘光範」なる伝不詳の人物が知られるのみである。しかし、『禅門悉談章』や『俗流悉談章』の序に記される作者定恵の肩書「嵩山会善寺沙門」を信用するならば、浄覚[33]のグループは嵩山においても活動していたと考えることが出来よう。そして、浄覚が直接撰した『楞伽師資記』だけではなく、弟子によって纏められた『注般若波羅蜜多心経』や、浄覚下或いは同グループに属する「定恵」らによって『禅門悉談章』・『俗流悉談章』・『般若心経悉談章（擬）』等の著作が編まれ、その教えや祖統の主張が広められる

ことによって、教団や教線を維持・拡大していたと考えられるのである。

上来、あまり論究されてこなかった二つの『悉談章』について考察を加えてきた。所謂敦煌禅宗文献中には、問答集や燈史書以外にも様々な形態のテキストが残されている。教えの肝要を凝縮させた偈頌形式の『五更轉』・普寂の遺徳を偲ぶ為に作られ、讃文の形を採るＳ２５１２ｖ『第七祖大照和尚寂滅日斎讃文』（擬）や十二時・十二支を配し十二首の詩にて教えを説く『禅門十二時』等がその例であるが、「悉曇章」の形を取るテキストは、『禅門悉談章』・『俗流悉談章』・『般若心経悉談章（擬）』以外に管見の限り見当たらず、極めて珍しいと言える。浄覚のグループが何故このような形を取ったのか見解を得ることが出来なかった。また、『俗流悉談章』テキスト内に説かれる、俗世の営みへの詳しい考察や、『般若心経悉談章（擬）』とその他『般若心経』注釈文献との比較作業も行えなかった。これらは、今後の検討課題としたい。

俗流悉談章

夫悉談章者、四生六道、殊勝語言。唐國釋氏沙門定惠法師翻注。並合秦音鳩摩羅什通韻、魯流盧樓為首。
現練現。現練現。第一俗流無利見。飲酒食肉相呼喚。讒言諂偽相鬬乱、懐挾無明不肯断。魯流盧樓現練現。
貪愛愚癡無崖畔、眷屬婚姻相計半。三界牢獄作留難、俗流顛倒共嗟歎。延連現賢扇。努力各相勸。
何浪晃。何浪晃。第二俗流無意況。心中邪佞起欺誑、三毒四倒諍勢王。魯流盧樓向浪晃。西方浄土不肯向、
欲含魔軍相閉障。出離牢獄依無相。不生不滅速廻向。佯良黄賞。各各脩無上。
胡魯喩。胡魯喩。第三俗流世界住。戀着妻兒及男女、世世生生相嫁娶。魯流盧樓胡魯喩。竊見俗流憐男女、
幽閨内閤深藏舉。競覓榮華選婚主。相見恬言及美語、有人借問佯不許。喩蘆魯胡輸。被他催死去。
何邏何。何邏何。第四俗流愚者多。不自省覺談說他、夫妻鬬諍相罵呵。魯流盧樓何邏何。張眉努目喧破鑼、

牽翁及母怕你摩。皆不出離三界坡、将為此苦勝蜜多。那羅邏何舎。此悪法須舎。
何邏鑊。何邏鑊。第五俗流廣貪託。不知眾生三界悪、男女妻子交頭樂。積寶陵天不肯博。魯流盧樓何邏鑊。
春秋冬夏營農作、鋤田非地努筋膊。遍躰血汗交頭莫、一朝命盡深埋却。閻老前頭任裁度、無善因縁可推託。
受罪從頭只須作、縁牽不用諸縄索。藥略鑊鑠。此真言不錯。
何邏真。何邏真。第六俗流處六塵。不超無上清浄門、悪業牽来地獄存。魯流盧樓何邏真。俗流者仏果身、其
中脩習無苦懃、常業三徒地獄因。那羅邏真。隨意知心者莫嗔。
何邏移。何邏移。第七俗流多所疑。恆被身中六賊欺、不求解脱不思議。魯流盧樓何邏移。貪求財物養妻兒、
懃苦艱辛亦不辭。入門妻兒云索衣、出戸王官怪責遅。佯良浪黄賞。那何邏移。此苦真難向。
何邏空。何邏空。第八俗流佛性同。三乗演妙會真宗。魯流蘆樓何邏空。無為法性妙開通、愚迷衆生隔壁聾。
容龍洪春普。勧同然智燈。

＊　＊　＊

夫れ悉談章なる者は、四生六道の、殊勝の語言なり。唐國釈氏沙門定惠法師翻注す。並びに秦音の鳩摩羅什通韻に合して、魯流盧樓を首と為す。
現練現。現練現。第一に俗流は利見無し。酒を飲み肉を食いて相い呼喚す。讒言して諂偽し相い鬬乱し、懐に無明を挾みて肯えて断たず。魯流盧樓現練現。貪愛愚癡は崖畔無く、眷屬は婚姻して相い計半す。三界の牢獄は留難を作し、俗流顛倒して共に嗟歎す。延連現賢扇。努力して各の相い勸めよ。
何浪晃。何浪晃。第二に俗流は意況無し。心中邪佞欺誑を起こし、三毒四倒は勢を王に諍う。魯流盧樓向

浪晃。西方浄土に肯えて向かわずして、魔軍を含みて相い閉障せんと欲す。牢獄を出離するは無相に依る。不生不滅に速に廻向せよ。佯良黄賞。各各無上を脩せよ。

胡魯喩。胡魯喩。第三に俗流は世界に住す。妻兒及び男女を戀着して、世世生生相い嫁娶す。魯流盧樓胡魯喩。竊かに俗流を見るに男女を憐れみ、幽閨内閤深く藏して舉ぐ。競ひて榮華を覓め婚主を選ぶ。相い見えて恬言及び美語し、人有りて借問するに佯りて許さず。喩蘆魯胡輸。他は催死するを被り去る。

何邏何。何邏何。第四に俗流は愚者多し。自ら省覺せずして他に談說して、夫妻鬪諍し相い罵呵す。魯流盧樓何邏何。張眉努目して破鑼よりも喧しく、翁及び母を牽き你が摩するを怕れしむ。皆な三界の坡を出離せずして、将に為えり此の苦は蜜多に勝ると。那羅邏何舍。此の悪法須く舍つべし。

何邏鑊。何邏鑊。第五に俗流は廣く貪に託る。眾生は三界の悪を知らずして、男女妻子頭を交えて樂しむ。寶を積み天を陵ぎ肯えて博めず。魯流盧樓何邏鑊。春秋冬夏農作を營み、田を鋤き地を非り筋膊に努む。躰に血汗を遍くし頭を交える莫く、一朝に命、盡く深く埋却す。閻老の前頭に裁度を任せ、善因縁の推託すべき無し。罪を從頭に受けて只だ須く作すべくして、縁牽するに諸もろの縄索を用いず。藥略鑊鑠。此の真言は錯らず。

何邏真。何邏真。第六に俗流は六塵に處す。無上なる清浄門を超えずんば、悪業牽来して地獄に存す。魯流盧樓何邏真。俗流なる者は仏果の身にして、其の中に脩習して苦に懃る無きも、常に三徒地獄の因を業す。

那羅邏真。意に随い心を知る者は嗔無し。

何邏移。何邏移。第七に俗流は疑う所多し。恆に身中の六賊の欺きを被り、解脱の不思議を求めず。魯流盧樓何邏移。財物を貪り求め妻兒を養い、懃苦艱辛も亦た辭さず。門に入りては妻兒衣を索めんと云い、戸を出でては王官遅きを怪め責む。佯良浪黄賞。那何邏移。此の苦は真に向かい難し。

何邏空。何邏空。第八に俗流は佛性と同じ。三乗妙を演べ真宗に會す。魯流蘆樓何邏空。無為の法性妙に開通ずるも、愚迷の衆生は壁を隔てて聾す。容龍洪春普。勧むるは同しく智燈を然やさんことを。

『般若心経悉談章（擬）』

……靡空理方……無明無死老無苦無集……無所得般若菩提埵如是曜能……浅毫少莎好曜濯哠……

吁嚩路、吁嚩路。第七〇〇涅槃度。皆依般若波羅蜜多悟、観心無罣無礙故、無滅無生無恐怖。怖怛路倶。倶怛路怖。魯流蘆樓吁嚩路。遠離顛倒夢想故、究竟涅槃無染汚、寂滅凝然絶乖迂。喩嚩路怛路。胡輸莎喩蹤倶。嗄囉邏、嗄囉邏。八明般若幻合和。三世諸仏悉経過、皆依般若波羅深蜜多、證得阿耨多羅。波波怛邏、哆哆怛邏波、魯流蘆樓嗄囉囉。三藐三菩提大覚那、亦能自利利於他。悲智圓満倶摩訶、皆依般若成仏陀。耶囉囉怛、邏和奢莎、訶耶茶迦。

嗄囉浪、嗄囉浪。九明般若神咒廣。是大明咒能開晃、照曜魔軍自除蕩。蕩怛迦迦怛浪蕩、魯流蘆樓嗄囉浪。是無上咒無背向、是無等咒無等量。超過日月大圓相、能除一切苦妄。真實不虚神咒状。後擧流通満十方、令遣讀誦遍稱揚。揚良浪怛浪。黄棠娑訶揚長迦。

奚利異、奚利異。第十流通神咒世間希。羯帝不思議、波羅羯帝秘深微、波羅僧羯帝會無為、菩提薩娑訶間利。啞啞怛例、鶏鶏怛例啞、魯留蘆樓奚利異。此之四句甚慈悲、能去邪魔顛倒疑。讀誦観照證菩提、流布咸令遣受持。所求之者應心随、得出三界不思議。移離利怛。

利奚履娑。唏移嘡計。悉談、悉談。摩嗄囉耶。如来衆行等恒沙、融變三千無有差。各々精心勲結跏、東湧西沒莫能遮。遮車闍饍若。神通照用坐蓮花、口放浄光曜衆那、下至阿鼻上嘖吨。吨帰茶怛茶拏。嗄囉爛。光明無殊照世間、見者因光除我慢、各發菩提離囂幻。

＊　＊　＊

……靡空理方……無明無死老無苦無集……無所得般若菩提埵如是曜能……浅毫少莎好曜濯晧……吁嚩路、吁嚩路。第七〇〇涅槃度。皆な般若波羅蜜多に依りて悟り、心に罣無く礙無きを観ずるが故に、滅無く生無く恐怖無し。怖怛路倶。倶怛路怖。魯流蘆樓吁嚩路。顛倒夢想遠離するが故に、涅槃を究竟して染汚無く、寂滅凝然として乖迂を絶す。喩嚩路怛路。胡輸莎喩蹤倶。

嗄囉邏、嗄囉邏。八に般若は幻に合和することを明らむ。三世諸仏悉く経過すること、皆な般若波羅深蜜多に依りて、阿耨多羅を證得す。波波怛邏、哆哆怛邏、波魯流蘆、樓嗄囉囉。三藐三菩提は大覚那にして、亦た能く自ら利し他を利す。悲智圓満にして摩訶を倶え、皆な般若に依りて仏陀と成る。耶囉囉怛、諫和奢莎、訶耶茶迦。

嗄囉浪、嗄囉浪。九に般若神咒は廣きことを明きらむ。是れ大明咒は能く晃を開き、照曜すれば魔軍自ら除蕩す。蕩怛迦迦怛浪蕩、魯流蘆樓嗄囉浪。是れ無上咒は背向すること無く、是れ無等咒は等量無し。日月大圓相を超過して、能く一切苦妄を除く。真實にして虚ならざるは神咒の状なり。後に擧げて流通せしめて十方に満たし、讀誦して遍く稱揚せしむ。揚良浪怛浪。黄餉娑訶揚長迦。

奚利異、奚利異。第十神咒を流通するは世間の希なり。羯帝不思議にして、波羅羯帝は深微を秘し、波羅僧羯帝は無為に會し、菩提薩娑訶は利を問つ。啞啞怛例、鶏鶏怛例啞、魯留蘆樓奚利異。此の四句は甚だ慈悲にして、能く邪魔顛倒の疑を去らしむ。讀誦観照して菩提を證し、流布して咸な受持せしめよ。之を求むる所の者は應に心に随うべくして、三界の不思議を得出す。移離利怛。

利奚履娑。唏移嘡計。悉談、悉談。摩嗄囉耶。如来の衆行は恒沙に等しく、三千に融變して差有ること莫し。

各々心を精らにして結跏に懃むれば、東湧西沒して能く遮ぎること莫し。遮車闍饍若。神通照用して蓮花に坐し、口浄光を放ちて衆那を曜かすこと、下阿鼻に至り嘖吨を上る。吨帰茶怛茶拏。嗄囉爛。光明殊に世間を照らすこと無く、見る者は光に因りて我慢を除き、各おの菩提を發して囂幻を離る。

註

（1）柳田聖山『柳田聖山集第六巻　初期禅宗史書の研究』法蔵館　二〇〇〇（初出は一九六七）

（2）田中良昭『敦煌禅宗文献の研究』大東出版社　一九八三『敦煌禅宗文献の研究　第二』大東出版社　二〇〇九を参照。

（3）伊吹敦「法如派について」『印度学仏教学研究』七九　一九九一、近刊では、同「「東山法門」と「楞伽宗」の成立」『東洋学研究』四四　二〇〇七や、「「東山法門」の人々の傳記について（上）」『東洋学論叢』六二　二〇〇九等が挙げられる。

（4）小川隆「初期禅宗形成史の一側面　普寂と「嵩山法門」」『駒沢大学仏教学部論集』二十　一九八九

（5）その他、国内外を問わず取り上げるべき論考も多いが、上註諸氏の論考にて詳細に紹介されているので、本稿では割愛した。

（6）元来、悉曇関係テキストには「曇」の字を使い、『悉曇章』とするのが普通であり、『般若心経悉談章（擬）』の場合、タイトルが不明である為、仮に『般若心経悉談章（擬）』と名付けているので、本来的には「曇」の字を記しているかも知れないが、関係の深い『禅門悉談章』及び『俗流悉談章』の敦煌テキストはすべて「談」の字を使っているので、これらに合わせて「悉談」とした。

（7）『禅門悉談章』を含めた先行研究を列挙すると、矢吹慶輝『鳴沙余韻・解説篇』岩波書店　一九三三　五〇一～五〇二頁を嚆矢とし、本邦では、田久保周譽『批判悉曇学』第一篇真言宗東京専修学院　一九四四、馬淵和夫『増訂　日本韻学史の研究』臨川書店　一九八四、同『悉曇章の研究』勉誠出版　二〇〇六と、殆ど研究がなされていない。海外においては、任二北『敦煌曲初探』上海文芸聯合出版社　一九五四、任半塘主編『敦煌歌辞総編』上海古籍出版　一九八七（任二北『敦煌曲初探』の再編）、饒宗頤『梵学集』上海古籍出版　一九九三、周広栄『梵語《悉曇章》在中国的伝播与影響』宗教文化出版社　二〇〇四、李強「敦煌禅宗『壇経』与仏教詩歌辞勘証」『敦煌仏教与禅宗学術討論会文集』三秦出版社　二〇〇七等の諸論考により、全文の翻刻・解説や思想内容に関する考察が行われているが、今回取り上げる二つの『悉談章』に『禅門悉談章』を含めた論は少ない。

（8）前掲田久保書七六頁

(9) 前掲任半塘書九四〇～九五四頁

(10) その他、前掲饒書は、北宗僧侶の可能性を論じながら、S五八〇九『大興善寺禅師沙門定恵讃』を取り上げ、大興善寺が譯経寺院であり、そこで学んだ定恵が梵字・悉曇学に通じていた為『悉談章』を著したと論ずる。（一四四頁・二〇五～二〇八頁）確かに、『禅門悉談章』の作者定恵の肩書は嵩山の僧であるが、大興善寺にも属したことがあったとは十分考えられる。しかし、定恵が悉曇学に通じているのであれば、何故このような所謂「悉曇章」とは全く異なる名前だけの『悉談章』を作成したのかと言う疑問が筆者には生じるが、その点について、論述はなされていない。

(11) その点は、拙稿にて既に指摘した。詳細は、拙稿「『仏説楞伽経禅門悉談章』について―特に新資料紹介と作者・成立年代を中心に―」『花園大学国際禅学研究所論叢』三　二〇〇八を参照のこと。

(12) この「鳩摩羅什通韻」には関係性の指摘されるテキストが数種存在する。敦煌文献中、S一三四四vに『論鳩摩羅什通韻』と擬題されるテキストや中国では古逸であるが、本邦に伝わり遺され、鳩摩羅什に帰せられるテキスト『涅槃経悉曇章』等との関係は既に前註（9）及び「『仏説楞伽経禅門悉談章』について―特に思想考察を中心に―」『印度学仏教学研究』五七―二　二〇〇九にて論じたので、そちらを参照されたい。

(13) 田久保前掲書七六頁、任二北前掲書七一頁、周前掲書三八八～四〇〇頁

(14) 前註（9）及び（11）拙稿。

(15) 住心看浄、起心外照、摂心内澄、非解脱心、亦是法縛心、不中用（『神会の語録』八四頁）

(16) 例えば、『神会の語録』六～十二頁

(17) 「『宋高僧伝』巻八・唐洛京荷沢寺神会伝」に、開元八年勅配住南陽龍興寺（大正五十　七五六c）とある。

(18) 例えば、『楞伽師資記』求那跋陀羅章では

大道本来広遍、円浄本有、不従因得、如似浮雲底日光、雲霧滅盡、日光自現（中略）亦如磨銅鏡、鏡面上塵落盡、鏡自明浄（柳田『初期禅史Ⅰ』一一二頁）

とある。また、『観心論』では、

十地経云、衆生身中有金剛仏性、猶如日輪體明円満、広大無辺。只為五陰重雲之所覆、如瓶内燈光、不能顕了。又涅槃経云、一切衆生皆有仏性。無明覆故、故不得解脱（田中『敦煌Ⅱ』一〇五頁）

とあるが如くである。

(19) 詳細は前註（11）の拙稿にて既に述べたので、そちらに譲るが、例えば、『大乗無生方便門』では、

一念浄心、頓超仏地（鈴木『全集Ⅲ』一六八頁）

と述べる個所があり、この「一念浄心」は、『禅門悉談章』にて、

諸仏子常覚悟、一念浄心無染汚、一切魔軍自然去。閻閻屢専注、娑訶耶大悟（大正八五　五三六b～c）

と同様の説示が行われる。

(20) 前掲任書及び周書（三九三～三九四頁）に於いて既に翻刻はなされている。しかし、句読点の打ち方及び漢字の翻刻の点において筆者と見解を異にする点があるので、改めて翻刻を行った。

(21) 詳しい書誌（写本年代等）については、任継愈主編『国家図書館蔵敦煌遺書・第九十六冊』北京図書館出版社　二〇〇八「條記目録」二八頁を参照。

(22) 『涅槃経』文字品に、

　魯流盧楼如是四字説有四義。謂仏法僧及以対法。言対法者隨順世間。如提婆達示現壊僧、化作種種形貌色像。為制戒故。智者了達不應於此而生畏怖。是名隨順世間之行。以是故名魯流盧楼（大正十二　六五五ａ）

とあるのを受ける。

(23) その他、飲酒・食肉や結婚の譬え等もあるので、稿末の本文を参照いただきたい。

(24) 初期禅宗文献中、『観心論』においては三毒・三界・六根・六賊に対応して三聚浄戒・六波羅蜜に関して詳説されることが特徴的である。全文を挙げると長文になるので、田中『敦煌Ⅱ』一〇五～一一二頁の原文及び訓読を参照のこと。

(25) 前註（11）拙稿に於いて指摘した。

(26) 浄覚撰『注般若波羅蜜多心経』に代表される『般若心経』注釈書の多くは、『般若心経』の本文を大字で書き、それに対する注釈を下に小字で書き綴るが、本テキストは七字句の偈頌の形を採るので、そのような体裁にはなっていない。

(27) 『観心論』全体に渉って、「観心」の要を説くが、

　問曰、若復有人、志求佛道、當修何法、最為省要。答曰、唯観心一法、惣攝諸行、名為最要（田中『敦煌Ⅱ』一〇四頁）

を例として挙げておく。

(28) 一例を挙げると『楞伽師資記』慧可章に「十方諸仏、若有一人、不因坐禅而成佛者、無有是處」（柳田『初期禅史Ⅰ』一四三頁）とある。

(29) これら『般若心経』の注疏書への研究は少なくない。まず解題・録文が方広錩編『般若心経譯注集成』上海古籍出版社一九九四によりなされている。また論文としては、伊吹敦「般若心経慧浄疏の改変にみる北宗思想の展開」『仏教学』三二　一九九二や、程正「『般若心経』と初期禅宗―禅僧による注疏を中心にして―」『駒澤大学仏教学部論集』三七二〇〇六を初めとする程氏の『般若心経』注疏書への諸論考を参照のこと。この二氏より更に古い論考は、両氏の論文にて先行研究を紹介しているので、割愛した。

(30) 『般若心経悉談章（擬）』と『注般若波羅蜜多心経』との間で比較検討を行ったが、『般若心経』の受持・讀誦等の推奨と言った当然と考えられる文句以外は特に記すべき重要な類似や同一表現を見出すことが出来なかったので、本論では触れていない。

(31) 自菩提達磨天竺東来、以法傳惠可。惠可傳僧璨、僧璨傳道

信、道信傳弘忍。継明重跡、相承五光（中略）大師歎曰、東山之法、盡在秀矣。命之洗足、引之並坐。於是涕辞而去、退藏於密（『全唐文』巻二三二）

(32) 有東都沙門浄覚師。是玉泉神秀禅師弟子、造楞伽師資血脈記一巻、接引宋朝求那跋陀三蔵為第一祖。不知根由。或乱後学云、是達摩祖師之師求那跋陀。自是訳経三蔵小乗学人不是禅師。訳出四巻楞伽経、非開受楞伽経與達摩祖師（柳田『初期禅史Ⅱ』五九～六十頁

(33) 近年、浄覚の人物関する研究が積極的に行われており、生没年等、種種の説が提示されている。詳しくは、程正「浄覚―その人と思想―」（『駒沢大学禅研究所年報』十三・十四合併号　二〇〇二）千田たくま「二人の浄覚」（『花園大学国際禅学研究所論叢』二　二〇〇七）、同「『楞伽師資記』の撰述年代」（『印度学仏教学研究学』五六―一　二〇〇七）等を参照のこと

略号一覧

柳田『初期禅史Ⅰ』　柳田聖山『禅の語録2　初期の禅史Ⅰ』筑摩書房　一九七一

柳田『初期禅史Ⅱ』　柳田聖山『禅の語録3　初期の禅史Ⅱ』筑摩書房　一九七一

『神会の語録』　唐代語録研究班編『神会の語録』禅文化研究所　二〇〇六

鈴木『全集Ⅲ』　鈴木大拙『鈴木大拙全集　第3巻』岩波書店　二〇〇〇

田中『敦煌Ⅱ』　田中良昭『敦煌禅宗文献の研究　第二』大東出版社　二〇〇九